

第二十二回 学術大会発表要旨

プラトニズムの知をめぐる一考察

筑波大学大学院 土井 裕人

プラトンの『ティマイオス』に於ける「知の上昇」というモティーフは、『国家』の場合のように必ずしも明確ではない。しかし、同篇で語られている「神に似ること」には、このモティーフがあらわれている。『ティマイオス』に於ける「神に似ること」とは、神である宇宙のヌース（知性・叡知）的循環運動に人間のそれを似せることであり、出生時に攪乱された、人間の神的魂＝ヌースの循環運動を恢復することである。しかし、この「神に似ること」は、人間が神としての宇宙に似るというだけではなく、宇宙を制作したデミウールゴス（制作者）や善のイデアにも関わることだと考えられる。そして、その具体的過程とは、天体の運行として可視的に顯現している、神たる宇宙のヌースのはたらきに人間の知のはたらきを似せることであり、この模倣を可能にしているのは、存在構造や知的活動の構造に於ける、宇宙と人間の本来的な照應である。

「神に似ること」の過程は、可視的、すなわち感覺的に顯現した天体の運動を、昼と夜という、太陽により生み出される最もわかりやすい周期から觀察することに始まる。そして、そこから時間や歴概念に到達し、万物の本性を考察して、最終的に哲学（愛智）の嘗みに至ることにより、「神に似ること」は達成される。もちろん、

哲學に於いては、天体の可視的運動をもたらす不可視の魂が探究される。従つて、『ティマイオス』に於ける「神に似ること」は、感覺的対象から可知的対象へ人間の知的活動を上昇させていく、「知の上昇」であると言えよう。

しかし、ここで問題となるのは、感覺的対象から可知的対象へ、人間の知的活動がどのように上昇しうるかということである。プラトンに於いては、感覺的な現象界と可知的なイデア界との間には深い断絶があり、その間の直線的な架橋は考えにくいからである。これについては、宇宙も人間の双方が持つと『ティマイオス』に於いて語られている、「同」の円環運動と「異」の円環運動について考察することで、一つの解釈案が得られる。「同」の運動は可知的对象に関するものであり、「異」の運動は感覺的対象に関するものと考えられる。この考え方の妥当性には課題が残るが、ブルタルコスやフィチーノの見解に沿つて、「二つの運動にこうした区別を考えるなら、「同」と「異」の運動は魂の認識作用として双方不可欠ではあるが、「同」の方が主導権を持ち支配的であり、「異」の方は「同」の方に寄与するという目的論的階層性がある、という解釈を導くことができる。そう考えると、人間は天体の可視的運行を観察することで、感覺的対象に関わる「異」の循環運動を恢復させて正しい思いなし（ドクサ）に至り、かかる後に、可知的対象に関わる「同」の循環運動を恢復させること、「知の上昇」の道行きを想定することが『ティマイオス』に於いて可能であろう。こうした「知の上昇」のモティーフは、もちろん、プロクロスや擬ディオニシオスといった後世のプラトニズムにも影響を与えていた。

ライプニッツにおける表出論の射程

筑波大学大学院 清水 洋貴

記号と事物、精神と身体、神の知性と人間の知性といった事物間に対応関係があるとなぜ言えるのか。ライプニッツの「表現」(représentation)ないし「表出」(expression)をめぐる議論は、事物についての真なる言説の、可能性および様式を問題としている。

ライプニッツは「表出する」(exprimere)という事態は、表出する側と表出される側の双方が有する関係の対応であるとみなし、「の両者は、「類似していむ」(simile)必要はなく、「類比」(analogia)があればよいとする(「観念とは何か」)。

ライプニッツの関係の区別によれば、類似と類比は、本質ないし可能的存在の間の関係であり、類比は複数の類似の比較とされる。現実存在の間で成り立つ関係は、現実存在するもの相互の時間的・空間的・因果的な依存によって規定される。こうした可能的なものと現実的なものとの区別からすると、「表出」とは、論理的に思考可能なものが、現実存在に対し適用される」とであるといえる。

だがここには問題がある。論理学的ないし数学的厳密さに従えば、わざかの非類似でも、類や種の分類の根拠となり、理論的には際限のない細分化が可能である。ライプニッツの考え方では、こうした分

類は、現実存在に関して有益な知識をもたらさない。それゆえライプニッツは、「まったく論理的な種差」と「本質的なものないし不变的なものに基づいた、まったく自然的な種差」との間に、「中

間をおく」とができる」とする。可能的なものと現実的なものとの、中間的領域での事物の探究こそ、有限な人間にとって、現実存在の知識の獲得を可能にする(「人間知性新論」36-84)と考えるのである。こうした中間領域における探究によって、類比として表出の発見もまた可能となるのである。

類比の基礎として、ライプニッツは、「恣意」(arbitrium)および「自然本性」(natura)の二つを挙げる(「観念とは何か」)。こので確認すべきは、人工言語などに見られる「恣意性」は、無根拠ではなく、むしろ何らかの根拠を有した人間の意向に基づく設定であるということだ。また、自然本性に基づく表出は、例えば、脳の痕跡と純粹知性の間、事物と发声器官の音や動きとの間に認められる。「形而上学叙説」十六節では、無制限的な觀念ないし本質を、人間の制限された「自然本性」に基づいて表出するとしている。

こうした考察から、表出の基礎が恣意と自然本性のどちらにあるにせよ、表出関係は、事物と事物の間に広く認められるようになる。モナドの哲学へ向かつて、「表出」概念は、道徳の問題を含み込みながら、モナドの在り方そのものとなり、「表象」(perception)概念へと移行していくという展望が開かれるが、これは今後の課題である。

アリストテレスは因果的決定論を反駁しているのか

筑波大学 上田 勲

アリストテレスの哲学のなかに決定論的な傾向が認められるることは、つとに指摘されてきた。それはつまり、彼自身が決定論の議論に対して反駁をおこなっていると考えられるテキストのなかで、アリストテレス自身が決定論に荷担しているような様子が見られること、その場合のアリストテレス自身の決定論からの離脱方法が必要も明瞭なものではないということである。問題となるテキストは「形而上学」E巻3章、「命題論」9章などである。

「形而上学」E巻3章の議論は、因果的決定論の論駁と考えられてきた。しかし、彼が原因の系列の連鎖がそこで終わると考える「付帯的な原因」は、常にでも、多くの場合にでもなく生ずる「偶然的なこと」であり、それもまた原因を持つとされている点で、物理的な必然性に基づく因果連鎖を断ちきるものではない。最近の解釈では、アリストテレスはすべての出来事に自体的な原因を考えることはできないという主張をしているとしてこの議論を理解すべきである。アリストテレスは因果的決定論を回避できているのか。

このとき問題となるのは、アリストテレスが原子論的必然性を、論理的・概念的必然性に基づく自らの実体論の立場からどのように扱い、形相という観点から説明しようとしているかということであると思われる。彼は、「形而上学」H巻で質料と形相は同一であるというとき、事実的同一性に基づく論理的必然性が「説明」の根底にあるものであると考へている。

論理的・概念的必然性によって説明をおこなうアリストテレスの

立場は、様相の問題では、可能性と現実性の内的関係を持つ論理的必然性としてあらわれる。可能なものは実現しなくてはならないというアリストテレスの可能性に対する基本的な立場は、「形而上学」④巻のメガラ派に対する批判の前提となっている。彼はここで、その前提から、可能なことは不可能とは異なるということを導き、メガラ派を論駁しているのである。

最後に、以上に見てきたアリストテレス独自の様相理解から「命題論」9章の問題を読解する。対立する肯定の主張と否定の主張とともに偽であることはできない、それゆえ、未来の事柄についての主張が真であるならば、それは必然的に真でなければならないとする決定論者の立場は、可能性は現実性と内的関係を持つというアリストテレスの基本的な立場と共通する面を持つている。しかし、すべてが必然的に生じるということは「あることもない」ともあるものが「」を抹消することになる。アリストテレスは、ここでもメガラ派の論駁と同じ方法、つまり、可能性と不可能は異なるという議論をもちいている。そのさいに彼が依拠するのも可能性と現実性がその内的な関係において持つ論理的・概念的必然性である。

アリストテレスにとって「あることもない」とあるもの」の存在は自明であった。しかし、なぜ彼は、彼自身が決定論者であるとも受け取られかねない仕方で、決定論者の説の反復を多くおこなっているのであろうか。彼が決定論者の説の反復をおこなっているのは、そのなかに含まれている論理的・概念的な必然性を問題にし、そのような必然性を擁護する立場から、決定論者の議論とは逆に偶然性や可能性に場所を与える議論を展開しているからである。しかし、彼の様相の理解に含まれている決定論的傾向は、必要以上に彼が決定論者の議論に荷担してしまっているかのような印象を与えるのである。

環境倫理と経済問題

筑波大学 笹澤 豊

地球環境問題は経済問題との関わりを抜きにして論じることができない。我々が環境汚染にコミットするのは、さまざま（生産や消費の）経済活動を通じてだからである。问题是、我々がもたらす汚染の総量が、自然界の自己回復能力を——環境の容量を——はるかに越えたものになってしまっていることである。環境の容量を越えれば、汚染は環境「破壊」になり、我々の生存基盤を脅かすものになる。

はつきりしているのは、汚染の総量を減らすことが——したがつてまた、生産・消費・廃棄の規模を縮小することが——ぜひとも必要だということである。そこで、（物質的快樂を重視する）現行の価値観からの脱却を説く倫理の主張が脚光を浴びることになる。しかし、こう主張するだけで問題が解決するほど、事は単純ではない。というのも、経済を基幹とする我々の社会は、頑として生産・消費の——したがつてまた廃棄の——規模の縮小を許さないような構造を持っているからである。その際、理由として持ち出されるのは、失業者の増加であるが、とするなら、いま求められているのは、生産・消費・廃棄の規模を縮小しても、雇用が減らないような新たな仕組みを構想し、そういう仕組みを基盤とした社会形態へと構造の転換をはかることであろう。

具体的な問題として、今、温室効果ガスによる地球温暖化現象が

クローズアップされている。産業を自動車に譬えれば、温室効果ガスの排出削減は、自動車排気ガスの総量削減を意味する。削減の方策としては、エンジンの排気量を小さくする方法と、エンジンの燃焼効率を改善する方法とがあり、前者は生産・消費・廃棄の規模の縮小に対応する。日本政府がどうしているのは後者の方法であるが、これが一定の効果を發揮するのは、あくまでも「走行距離を従来の範囲内にとどめる」という条件下でのことである。走行距離を従来以上に増やせば、いくら燃焼効率を改善しても排気ガスの総量は削減できない。ところがこの車は、「経済成長を後退させてはならない」という至上命令を受けているので、ガソリンの消費量を減らすことが許されず、したがって走行距離を従来以上に伸ばさなければならない」——という至上命令を受けているので、ガソリンの消費量を減らすことが許されず、したがって走行距離を従来以上に伸ばさなければならないのである。これでは、燃焼効率の改善による効果は、完全に相殺されてしまう。これはまた、農薬等による化学物質汚染や、産業廃棄物等のゴミ処理問題への対応についても言えることである。

我々は「エンジンの排気量を小さくする方法」を取り入れなければならぬのではないか。失業者を出さずに、生産・消費・廃棄規模の縮小を可能にするような仕組み——その構想の具体化に手掛けりを与えるものとして、E・F・シューマッハーゲ「スマールイズビューティフル——人間中心の経済学」で提示した「中間技術（適正技術）」の考え方方に注目したい。

※なお、魚谷雅広氏の発表要旨は、論文と重複するため割愛する。